明治、京の尋常小校舎費寄付

学び支えた町衆 金杯が伝える

日彰尋常小校舎建設に住民が多額の寄付をしたことをたたえて国から贈られた金杯（京都市下京区・市学校歴史博物館）

明治時代に日彰尋常小（現高倉小）の校舎建設に寄付した地元住民に、国から贈られた「金杯」が京都市下京区の市学校歴史博物館で展示されている。1世紀以上引き継いできた住民が「京都の学校は町衆が作ったことを象徴する貴重な品。多くの人に見てほしい」と寄託した。

下京の博物館展示 寄託の地元「学校史証言」

金杯は純金で、大（約136㍉）中（約106㍉）小（約91㍉）の三つ重ね。1906（明治39）年6月、賞勲局から住民1054人宛てに贈られた。当時の賞状は「日彰尋常小建設費金壹萬六千六百七十四円寄附候段奇特ニ付為其賞金杯壹組下賜候事」と、国が校舎建設への寄付をたたえ、金杯を贈ったことを記している。

日彰自治連合会が編んだ「日彰百年誌」によると、同校舎は、個人や町の寄付金約4万7千円を含む、約6万5千円で明治37年11月に完成した。

内閣府によると、当時、1万円以上を公益のために寄付した人に金杯を贈る制度があったという。「資料は残っていないが、校舎建設への寄付に対して贈られるのは珍しいのでは」としている。

金杯を保管してきた経緯や、戦時中の供出を免れた理由は不明だ。ただ、数十年前からは同自治連合会が貸金庫で保管し、十数年前までは地元の新年会で杯として使用されたこともあった。山口正夫会長（73）は「地元で保管しているだけではもったいない。京都の学校史の証言として役に立ててほしい」と話している。

（藤松奈美）